

過疎地域における「安全で心の安まる集落づくり」 の調査研究

奈良県立大学地域創造学部
准教授 神吉 優美

1. はじめに

当研究のフィールドは奈良県十津川村谷瀬集落である。十津川村は奈良県最南端に位置し、面積が 672 km²と村としては日本一の広さを誇る。1970 年には約 8,500 人であった人口が、2015 年 3 月 1 日現在、3,651 人まで減少しており、人口減少が著しい。

この十津川村は、2011 年 9 月に発生した紀伊半島大水害によって、死者 7 人、行方不明者 6 人、全壊家屋 18 棟、半壊家屋 30 棟、道路被害 130 カ所という甚大な被害を被った。先ほど述べたような人口減少に加え、少子高齢化や産業の低迷等の問題を元々抱えていた地域であり、震災前の姿に戻す「復旧」ではなく「復興」を、そしてよりより村づくりへつなげようと村が一丸となって立ち上がった。そして、その一環として「新集落づくりに向けた集落再生プロジェクト」が始動し、モデル集落として高森集落と谷瀬集落が選定された。

2014 年度より、奈良県立大学（以下、県大）および奈良女子大学（以下、奈良女）の教員・学生が谷瀬集落の村づくりのサポーターとして参加している。この活動の内、今回は 11 月に実施した学生によるモニターツアーの①内容、②モニターツアーを振り返っての住民の感想、③モニターツアーを振り返っての学生の感想、④その後の村づくりの状況について報告する。



写真 1 谷瀬集落

2. 谷瀬集落の概要

谷瀬集落は、西坊・中切・上地・平地の 4 つの小字からなる。38 世帯、59 人が暮らしており、高齢化率は 37%に達している。

年間 14 万人の観光客が訪れる「谷瀬の吊り橋」のたもとの茶屋を集落の人たちで運営し、秋の松茸採りと出荷、冬の「ゆうべし」づくり等をすべて共同で行い、神事等の村の行事や新年会・敬老会等への出席率が高い等、村内でもつながりを大切にしている集落として有名である。

3. 新集落づくりに向けた集落再生プロジェクト

月に1回、〈寄合〉(写真2)が開催され、集落で暮らす人々や NPO スローライフジャパンや地域計画研究所といったコンサルタント、県大・奈良女の教員・学生が参加し、村づくりについて話し合い、村づくりに取り組んでいる。



写真2 寄合の様子

2014年度の具体的な活動内容を以下に示す。

① 交流活性化事業

a. ゆっくり散歩道の整備

谷瀬の吊り橋には多くの観光客が訪れるものの、その奥に位置する谷瀬集落を訪れる観光客はこれまでほとんどいなかった。村づくりを始めるにあたって、まずは谷瀬の中のことをより多くの人に知ってもらう必要があるということになり、吊り橋に来る人たちに谷瀬まで足を伸ばしてもらおうということになった。吊り橋から



写真3 集落の人手作りの展望台

谷瀬集落を通過して、227段の石段を登って森山神社まで行き、さらに山道を歩いた先にある吊り橋の全景が望める展望台(写真3)まで歩いてもらう〈ゆっくり散歩道〉を整備した。展望台整備のために雑木を伐採したり、休憩用のベンチを作ったり、草を刈ったりするための資材や作業は集落の人たちのボランティアでまかなった。女子大と県大は看板づくりで活動に参加した。当初はこのようなもので観光客が来てくれるのだろうかかと集落の人たちは半信半疑であったが、徐々に訪れる人が増えてきている。

b. モニターツアーの開催

c. 移住定住に向けた仕組みづくり

「谷瀬の吊り橋」facebook ページを開設して情報を発信してきた。また、今、移住希望者向けの「谷瀬集落 暮らし読本」を作成中である。

② 特産品開発事業

集落の特産品として、「ゆうべし」(柚子の実をくりぬき、味噌やそば粉、米粉、ゴマ、ピーナッツ等を詰めて蒸し、干したもの)や「めはり寿司」(高菜漬けの葉の部分でご飯を包んだもの)や「温泉プリン」等がある。今年度は、新しい「ゆうべし」の食べ方を考える試食会の開催やブランド力を高めるためのパッケージデザインの開発等に取り組んだ。

4. モニターツアーの開催

①内容

2014年11月8日～9日の1泊2日で、県大・奈良女の学生11人がモニターツアー〈ゆっくり体験〉に参加した。スケジュールを表1に示す。

表1 モニターツアーのスケジュール

<11月8日>

- 10:00 JR 五条駅前集合
ワゴンタクシーで谷瀬集落へ
- 12:00 キノコうどんを作って昼食
- 13:00 森山神社に集合
→掃除(写真4)
→展望台で休憩
- 16:00 餅まるめ体験(写真5)と立て看板づくり
@谷瀬公会堂
- 18:00 民宿到着後、夕食



写真4 森山神社の掃除



写真5 餅まるめの体験

<11月9日>

- 7:00 起床・朝食
- 8:00 ゆっくり散歩道をテクテク(立て看板の設置)
- 9:00 3グループに分かれて住民の方へインタビュー
「谷瀬の吊り橋」「村のお祭りの今と昔」等のテーマを決めてお話をうかがう。
- 11:00 吊り橋茶屋で昼食&お供え物の購入

ゆっくり散歩道を歩いて「森山神社」へ
- 12:30 神事の準備と総代から神事の解説(写真6)
- 13:00 神事 祝詞奏上(写真7)
- 13:30 餅まきスタート(写真8)@谷瀬公会堂
お神酒の拝戴
- 14:30 片づけ
- 15:00 <ゆっくり体験>の振り返りワークショップ
@民宿杉の原
- 17:00 谷瀬公民館前からワゴンタクシーで五条駅へ
五条駅到着後、解散



写真6 総代から神事についての解説



写真7 神事に参加



写真8 激しい餅まき

②モニターツアーを振り返っての住民の感想

モニターツアー開催後の〈寄合〉において、モニターツアーを振り返って参加者が感想を述べ合った。主な感想を以下に示す。

- ・外の人が参加するのに最初は少し抵抗があったが、やってみると楽しかった。
- ・年々、神事への参加者が減ってきていたので、賑やかでよかった。
- ・餅を丸めるという作業でこんなに喜んでもらえるとは思わなかった。つきたてのお餅を学生さんに食べさせてあげればよかった。
- ・でも、やはり今後もよその人に家に入られるのは嫌。

(神事でまく餅を準備するのはその年の当番になった世帯。普段は家で餅をついて丸めるのだが、家に学生が入るとなると掃除をしないといけないので嫌だという意見があり、今回は谷瀬公会堂に餅つき機を持ち込んで餅をついた。)

- ・神事なので賑やかだからいいというわけではないのではないか？

このように、いざやってみると賑やかで楽しかったという意見が大半を占めたが、最後に示したように、神事は単なるイベントではないので、その意味を理解していない参加者が増えても意味がないのではないかという意見もあった。

③モニターツアーを振り返っての学生の感想

モニターツアーの最後に、2グループに分かれて、「谷瀬での思い出」と「今度谷瀬でしたいこと」をテーマとしたモニターツアーを振り返るワークショップを開催した。ワークショップで出された意見を図1および図2にまとめる。

今回のモニターツアーを振り返って何が楽しかったかという「谷瀬の思い出」については、「たくさん自然」「水の音」「澄んだ空気」「吊り橋や展望台からの景色」「道端の蝶々や蜂」等自然の豊かさに関する意見、「激しい餅まき」「餅だけではない餅まき（カップラーメンやお菓子もまかれる）」等イベントへの参加に関する意見、「手作りの料理」「めはり寿司」等料理に関する意見が出されたが、最も多かったのが「迎えてくれる人が全員笑顔」「餅まき後の住民との会話」「(餅まるめ)作業しながらの会話」「住民から昔話を聞いたこと」等集落の人たちとの交流が楽しかったという意見であった。

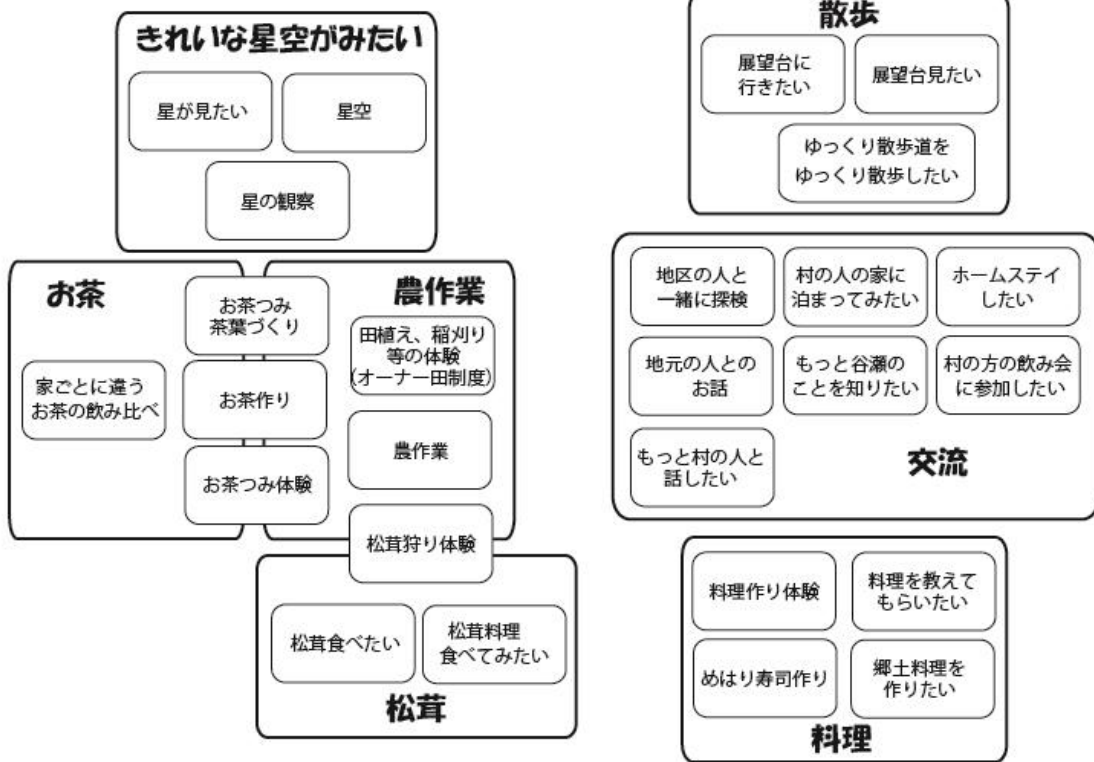
また、「今度谷瀬でしたいこと」については、「農作業をしたい」「郷土料理を作りたい」「お茶を作りたい」「マツタケを採りたい」等いろいろな体験をしたいという意見が多かったが、話を聞いたところ、単に作業をやりたいのではなく、集落の人たちと一緒にいろいろな作業をやりたいという意見であった。

豊かな自然については集落の人たちもその良さに気付いている点であったが、学生たちから集落の人たちと交流して楽しかった、またもっと交流したいという意見が多く出たことは、集落の人にとっては想定外のことであった。



図1 ワークショップで出された意見「谷瀬での思い出」

谷瀬でしたいこと (1班)



谷瀬でしたいこと (2班)

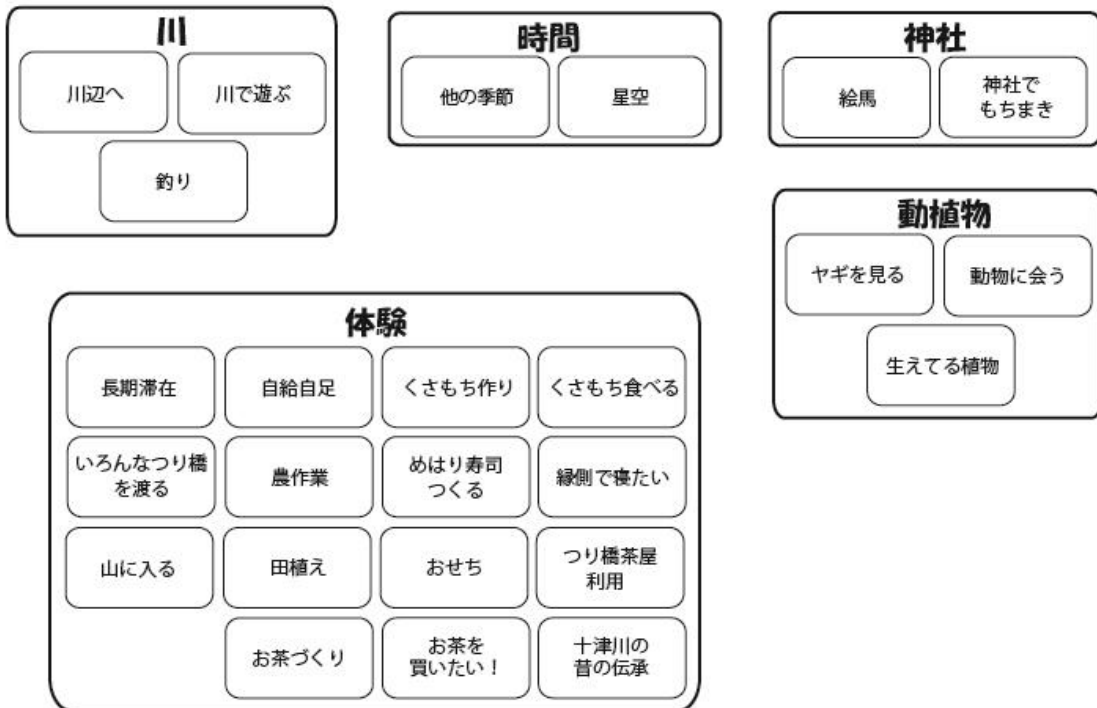


図2 ワークショップで出された意見「次回谷瀬でしたいこと」

5. その後の村づくりの状況

谷瀬集落での村づくりは現在も集落の人たちを中心に進められている。2015年の2月には、学生が大勢来た時や移住希望者が長期滞在する時のために、集落内の空き家を集落が借り上げてゲストハウスを開設した。また、3月にはゆっくり散歩道の間位置するところに集落の人たち手作りの大きな水車(写真9)が完成した。そして4月には一般の人を対象にモニターツアーを開催する。



写真9 水車のお披露目会

今年度は神事というイベントを中心としたモニターツアーであったが、来年度は谷瀬集落ならではの「手間暇かけた丁寧な暮らしづくり」に学生が参加するモニターツアーを開催予定である。その下準備として、現在、学生が集落の人たちにインタビューして、「谷瀬の暮らしの歳時記」を作成中である。

6. 最後に

モニターツアーの開催は、交流人口を増加させ、将来的には谷瀬集落に移住してくる人を増やすことを目的としている。しかしそれだけではなく、地元の人にとっては当たり前の丁寧な暮らしづくりや人と人との絆が外の人間から見ると宝物であること、外の人間が集落の人との交流を望んでいることなど、集落の人たちがこれまで気づいていなかった集落の良さを再確認する機会にもなったであろう。

集落の人たちが話し合い、時間と労力を出し合って回り始めた村づくり。来年度以降も、教員と学生たちがサポーターとして参加する予定である。